

# そよかぜ通信



## 新しい教科書のご紹介

2年度版 せいかつ ①みんな なかよし  
②なかよし ひろがれ



生活科・総合通信

# そよかぜ

通信

2019年  
春号

## 目次

### ●巻頭言

#### 生活科で育む 「6つの力」

東京都江東区立明治小学校 統括校長  
喜名朝博

### ●幼児教育現場からのメッセージ

#### 学びの根っこ 学びの芽は育っている

練馬区立光が丘さくら幼稚園 園長  
日高 文子

### ●「生活科」実践

#### 見えてきた！ 「スタートカリキュラム」のカタチ

東京都練馬区立光和小学校指導教諭  
根本 裕美

### ●「総合」実践

#### 「十市っ子弁当」で 地域の方を笑顔に！

～「どうせでせん」から  
「一生に一度だけのすばらしい体験」に～  
高知県南国市立十市小学校 教諭  
増井 貴久

### ●2年度版 せいかつ ◎みんな なかよし ◎なかよし ひろがれ

#### 新しい教科書のご紹介

16



表紙イラスト：てづかあけみ

# 生活科で育む「6つの力」

東京都江東区立明治小学校 統括校長  
喜名朝博

書店には「〇〇力」とうタイトルの本が溢れている。変化の激しい社会を生き抜くためにどんな力が必要なのか、その不安への答を求めている人が増えているのかもしれない。今回の学習指導要領の改訂もそのような社会に対応することが理念となっている。人口減少という厳しい状況の中で生きていく子どもたちには、考え方や価値観の異なる多様な他者と協働し、新たな価値を生み出していくことが求められている。そのために必要な資質・能力は何か、それをどうやって身に付けていくのか、授業改善のポイントはここにある。

## 1 「〇〇力」が課題解決の鍵

生活科の課題は以下の3点である。

- ・発達段階に応じた思考や認識の育成
- ・幼児教育とのつながり
- ・中学年の各教科等への接続

これらの課題解決の鍵となるのが「資質・能力」である。例えば、生活科における主体的な活動を通して育まれる「考える力」はどのように育成されていくのか、他教科等でどう発揮されていくのかを明



確にしていけることで「活動あって学びなし」の状態から脱却できる。さらに、生活科で育まれた「○○力」が3年生以降の教科等にどうつながっていくのかを明らかにすることでカリキュラム・マネジメントが完結する。幼児教育とのつながりでは、その解決策のひとつがスタートカリキュラムである。1年生はゼロからのスタートではないことを前提に、幼児教育によって育まれてきた「○○力」を把握し、入門期からそれを生かしていく。幼児教育で育まれる資質・能力は、幼稚園教育要領・保育所保育指針に示されている。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする。

「知識及び技能の基礎」

- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを、使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする。

「思考力、判断力、表現力等の基礎」

- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする。

「学びに向かう力、人間性等」

幼児教育では、遊びを中心とした豊かな活動を通してこれらの資質・能力が一体的に育まれていく。就学後はこれらの資質・能力の基礎を念頭に指導計画を作成して各教科等の授業をしていくことになる。特に生活科はスタートカリキュラムの核となる教科であり、「○○力」の伸長を俯瞰していかなければならない。

## 2 生活科で育む「○○力」

では、生活科で育むべき資質・能力、「○○力」とはどんなものか、学習指導要領に示された目標を見ていきたい。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

冒頭の4行は生活科のあるべき姿を示している。

### 「具体的な活動や体験」

生活科の前提であり、最も重視すべきことである。見る・聞く・作る・探す・育てる・遊ぶなど、対象に直接的に働きかける学習活動、多様な方法による表現活動を行うことで、資質・能力が育まれていく。

### 「身近な生活に関わる見方・考え方を生かし」

身近な生活に関わる見方とは、自分との関わりで社会や自然を見ていくという視点である。身近な生活に関わる考え方とは、自らの思いや願いを実現していく過程で、自分自身や自分の生活について考えていくことである。

具体的な活動や体験によって既有的見方・考え方がより確かなものになっていく。

### 「自立し生活を豊かにしていく」

自立とは、学習上の自立、生活上の自立、精神的自立を指している。生活を豊かにするには、生活科での学びを生活に生かすこと、生活科の生活化と言われてきたことである。「豊か」という言葉の解釈が難しいが、単に生活を便利にするということだ

けではなく、関わりの多様化や生活の充実、思いや願いの拡大・充実を指している。

「～ための資質・能力を次のとおり育成する」

自立し生活を豊かにするための資質・能力が(1)～(3)に示されている。それぞれは育成を目指す資質・能力の3つの柱に対応している。

- (1)知識及び技能の基礎
- (2)思考力、判断力、表現力等の基礎
- (3)学びに向かう力、人間性等

構造的で一貫性のある目標である。しかし、見方・考え方と資質・能力の3つの柱の関係は難解である。実際に単元や1時間の目標に落とし込むにはかなりの検討が必要である。生活科で育む「○○力」をもっと明解にしていきたい。

**3** 6つの「○○力」

そこで、生活科で育むべき力を6つに整理した。見方・考え方や目標の資質・能力3つの柱の理念も包含している。また、子どもたち自身が活動や成長を振り返る際にも活用できる。さらに、中学年以上の学習にも生かされる汎用性の高い資質・能力であるとも言える。指導者がこの6つの力を意識することはもとより、子どもたち自身にもこの6つの力の視点で振り返らせていきたい。

- ①気付き力
- ②自分でできる力
- ③考える力
- ④伝える力
- ⑤挑戦する力
- ⑥自信をもつ力

**4** 本校実践 「まち探検」で育まれる「6つの力」

本校は下町情緒あふれる地域にあり、由緒ある寺社も多い。風情あるこの街も、近年はコーヒー店やおしゃれなカフェ、おいしいスイーツの店が増えて



きた。2年生の2回目のまち探検では、そんなお店の人たちとのかかわりを重視した。

(1)気付き力

「カフェのマスターがみんなひげを生やしているのはなぜだろう」

お店の人とのかかわりによる子どもたちの気付きは、ほかのグループからの情報も得て帰納的に結論を出した。気付きが疑問となり、次の活動の必然性を生む。個々の「気付き力」は、グループや学級で共有することで、より確かな力になっていく。

(2)自分でできる力

自分にはどんな力があるのか、自分でもわからない。だからこそ、生活科では具体的な活動や体験を大切にしている。

今回の学習のまとめはタブレットPCを使った。「タブレットで作るのはむずかしかったけど、みんなに見てもらいたいという気持ちでやったらできた。」

**フルーツのたね**



コーヒーは、何からできているかふしぎでしたが、フルーツのたねからコーヒーまめができていてびっくりしました。  
お母さんに伝えたからお母さんもびっくりしていました。キッズ向けのチョコのホットコーヒーもあってとてもおいしかったので、行ってみてください。

**ブルーボトルの人の気もち**



たくさんの人に「おいしい。」と思ってもらえるように、お客の人たちが、ていねいにしようひんをつくっているそうです。  
コーヒーがおいしいに気づいているから、ワッフルや、コーヒーがおいしいんだなあと思いました。ぜひ行ってたべてみてください。

**一ばんのおすすめ**

ブルーボトルのいちばんのおすすめは、ドリップコーヒーです。夏はアイスコーヒーです。  
わたしは、夏でもふゆでもアイスコーヒーと、ワッフルがすきで、よたべています。  
とてもおいしいです。  
ぜひ行ってたべてみてください。

**ブルーボトル**

「ポスターを作って見せたら、お店の人にいっぱいほめられた。自分たちでこんなことができてすごいと思った。」

自分でできる力は、友だちや教師だけでなく、その対象自身が後押ししてくれることによって発揮される。ここに生活科ならではの学びがある。

### (3) 考える力

学習のまとめと探検のお礼の意味を込めてポスターを作るようになった、ポスターに入れる情報について考えを出し合い、思考ツールの一つであるダイヤモンドランキングを使って整理した。「お店の一番のおすすめ」を挙げた子どもは、その理由として「お店の役に立ちたいと思った」と発言し、上位に位置付いた。「考える力」は仲間とのコミュニケーションによって深まりと広さを得る。また、視点を移動して相手の立場に立って考えられるようになることも大切な考える力である。視点の移動は思いやりの心につながる。

### (4) 伝える力

思いや気付きは表現することで他者に伝わる。伝えることは一方的に発信することではなく、相手に伝わるのが条件である。それは伝える相手へ思いを巡らすことでもある。

深川の街を紹介するキャッチフレーズは、より多くの人に街の魅力を伝えるということがコンセプトになっている。

「おいしさとやさしさがあふれるまち深川」

「おいしさとお店の人の心がいっぱいいるのまち」

「今と昔を楽しめるまち、深川」

どのような内容と方法で伝えれば相手に伝わるか、対象を想定することでそれは明確になっていく。生活科の単元は、子どもたちの思いや願いを紡いで構成される。ストーリー性のある単元によって「伝える力」が発揮されていく。

### (5) 挑戦する力

質問したいことをメモにして探検に出た子どもた

ち。実際にその場で見聞きすると聞いてみたいことがどんどん増えていく。しかし、なかなか声を出せない子どももいる。そんなとき、仲間が自分の聞きたかったことを聞いてくれる。「よかった」という気持ちと、「次は自分が聞くぞ」とう決意が交錯する。生活科にはこんな葛藤や試行錯誤の場が豊富である。その中で子どもたちは「挑戦する力」と失敗にめげない力をつけていく。教師にはそんな子どもたちの内面を見取り、確かな力に昇華させていく役割がある。「挑戦する力」にはレジリエンスも含まれている。

### (6) 自信をもつ力

これまで見てきた5つの力は子どもたちの自信となるだろう。さらに生活科は、他者との関わりによってしか生まれえない「自己有用感」を育む。



最終的にお店紹介の地図を作った子どもたち。お店の人や他学年の教師からも「よくできてるね」と絶賛された。「ほかの人の役に立った。」「喜んでもらえた。」という自己有能感は自己肯定感の基となる。他者との関係の中で自分の力の高まりを自覚させることによって自信は生きる力となっていく。

子どもたちの思いや願いを縦軸に、教師の支援を横軸にして単元構成を考えたとき、その交点に浮かび上がるのが「6つの力」である。生活科の本質に迫る授業で子どもたちに確かな力をつけていきたい。

参考資料: 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編

# 学びの根っこと 学びの芽は育っている

練馬区立光が丘さくら幼稚園 園長  
日高 文子



## ■「ゼロからのスタートではない」 小学校生活のスタート

幼児期の終わりに、大勢の前でも堂々と修了証書を受け取り小学校へ巣立っていく年長組の子どもたち。

安心、安定した園の環境の中で集団生活の仕方がわかり、自分のことができるようになり自分で考えて動けるようになっていきます。また、友達と力を合わせることも経験して小学校に進学します。

しかし、小学校との連携は進んできているのですが、課題と感ずることもあります。例えば、入学式での式場に入場してきて席に着くまでの子どもたちの様子です。二人で手をつなぎ（多分安心して入場できるようにという配慮）並べてある椅子に手を離して順番に座るだけのことですが、先生方が丁寧に一人一人に手を離させ、誘導する対応をしてくださっていました。一列に並んで入場し順番に座ることがわかれば自分で考えて動けます。中には、緊張したり困ったりする子もいると思いますが、一部の子です。個別に安心できるように配慮することで自分で考えて動けます。

何気ない一コマではありますが、きっと小学校生活が始まるとさまざまな場面で、実態と違った丁寧すぎる働きかけが行われているのではないかと感じています。

幼児教育側から願うとしたら、幼児期に育ってきた子どもたちの育ちがスムーズに小学校生活で発揮できるように、一人一人の育ちに寄り添い安心安定する環境を工夫していただきたいということです。

## ■子どもの育ちを繋ぎ一緒に育てる 教育の横軸と縦軸

今、初等中等教育全体を通した学習指導要領の改訂の取り組みが進められています。幼稚園教育要領は平成30年度4月に保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領と同時に改定・全面実施されました。幼児期は、保育所、幼稚園、こども園と様々な施設で過ごします。『様々な施設から入学してくるのでそれぞれの特色があり受け入れ時に大変だ』という小学校側からの声を聞いたことがあります。今回、幼稚園教育要領等が同時に改定されたことで、3歳以上の幼児教育について共通の指導内容が確保され幼児期の教育に整合性がとられ横軸で繋がりました。全ての子どもに質の高い幼児教育を提供することが改訂の基礎です。また、今回幼児期から高等学校までの学校段階ごとに育成すべき資質・能力の3つの柱が明確化されました。私たち教師は、縦軸で繋がりが子どもたちのそれぞれの時期の育ちを繋いでいくことが重要です。小学校以降の3つの柱と合わせ表にしました。

幼児期	小学校以降
<b>知識・技能</b>	
豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする（基礎）	何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）
<b>思考力・判断力・表現力等</b>	
気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする（基礎）	知っていること・できることをどう使うか
<b>学びに向かう力・人間性等</b>	
心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする	どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

（教育要領より抜粋）



## ■ 幼児期の教育

幼児期の教育は主体的な遊びや生活を中心に、環境を通して総合的な指導を行っています。特に個人差が大きい時期なので幼児一人一人の成長、発達の特性に応じながら個々の興味関心に沿って行います。小学校以降の教科を中心とした教育と少し方法が違いますが、目指すところは一緒だと考えます。さらに幼児期に育みたい資質・能力の姿が『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』として、10の姿が具体的に明示されたことで、小学校と幼稚園などとの間でその姿を共有しやすくなったと捉えています。

幼児は夢中になって遊ぶ中で、好奇心や探求心をもち、問題を見出したり、解決したりする力が育っていきます。教師は子どもたちの育ちを読み取りながら一人一人の幼児が豊かな感性を發揮したり成長する機会を提供したりしてそれを伸ばそうとしています。小学校以降の教科学習の土台である『学びの芽』を育てています。10の姿は、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」です。これらの姿は別々に取り出して育てるものではなく総合的に絡み合っていて育っています。

## ■ 2月のこども会の姿・修了前の生活から

例えば本園では、2月にこども会があります。

ここでは、みんなで作った話で劇をします。その話は自分たちの生活や遊びの中から生まれます。園でかめの赤ちゃんが生まれてみんなで育てた年は、「かめの冒険」という話ができました。みんなでその話のイメージを膨らませながら絵を描いたり互い

の考えを言い合ったり、受け入れ合ったりしながら面白さを共有し共感しながら一緒に作りました。自分の考えを相手にわかるように伝えようとしたり受け止めたりできるようになってきています。

また、登場人物の中から自分がなりたいものを決め、それになりきるために必要なもの身に付けるものも遊びの中で培った技能や知識を生かして作ったり本物らしくしようとしたりして自分たちで進めていこうとします。劇に必要な登場人物でも誰もなり手がないと「どうしようか」と考え、みんなで考えた劇を実現するために「自分がやってもいいよ。」と調整しようとする子もいます。

グループで取り組んだことを、帰る前に振り返り、学級の友達の前で発表し友達と情報を共有し、そこでもほかのグループのしていることに刺激を受けたり認め合ったりアドバイスし合ったりすることもあります。

学級の友達と共通のテーマに向かってイメージを広げ、一緒に考えたり工夫したりしながら、学級としてのまとまりやつながりを感じ取り、心地よさを味わっていきます。主体的・対話的で深い学びがもうすでに始まっています。

10の姿の一つ「豊かな感性と表現」は『みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲が高まるようになる。』の姿も見られますが、「協同性」『友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げられるようになる。』も見られ10の姿がすべて含まれているのがわかります。

今回、小学校学習指導要領総則の第1章第3、4『学校段階等間の接続』に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、…」と明記されました。これまで以上に幼小の相互理解に生かされ生活科を中心に滑らかな幼小接続が行われていくことを願っています。

# 見えてきた！ 「スタートカリキュラム」のカタチ

東京都練馬区立光和小学校指導教諭

根本 裕美

「スタートカリキュラム」。

この言葉が使われたのは10年前の「小学校学習指導要領解説 生活編」である。10年といえば、生まれたばかりの赤ちゃんが小学校の中学年になるまでの年月であり、決して短い期間ではない。しかし、この10年間でスタートカリキュラムは、正しく理解され、どこの学校でも行われるようになったのかというと、「NO」と言わざるを得ない。現在、指導教諭という立場で授業を公開し、研修会を行っている。年度初め（5月下旬から6月上旬）の研修会で「スタートカリキュラムを実施していますか」と聞くと、「始めたばかりです。」「あまり自信ないのですが。」と言いながらも「実施している」と回答するのは2割から半数程度で、「初めて聞きました。やってみたいです。」という参加者も珍しくない。

なぜだろうか。

- 低学年（あるいは1年担任）が行うもの、という考えが根深くあり、他学年に広まっていない
- 「小1プロブレム」として問題になるような現象が起きていないため、必要だと考えていない
- 一つの教科を中核とした合科・関連的な指導によりカリキュラムを構成するという考え方が、教科指導を重視してきた小学校の現場に馴染みにくい大雑把ではあるが、理由としてはこの3つが考えられる。これらの理由に対し、どのように進めていったらよいかを考えるためにも、10年前に遡り、「スタートカリキュラム」について確かめたい。

## ■スタートカリキュラムのこれまでとこれから

### (1) スタートカリキュラムの「スタート」(H20)

「スタートカリキュラム」に関わる文言は、以下

にみられる。

「小1プロブレムなど、学校生活への適応を図ることが難しい児童の実態があることを受け、幼児教育と小学校教育への具体的な連携を図ること」（小学校学習指導要領解説 生活編 第1章 2生活科改訂の趣旨）という平成20年1月の中央教育審議会の答申を受け、

「幼児教育から小学校への円滑な接続を図る観点から、入学当初をはじめとして、生活科が中心的な役割を担いつつ、他教科等の内容を合わせて生活科を関連とする内容を取り扱ったり、生活科を核とした単元を構成したり、他教科等においても生活科と関連する内容を取り扱ったりする合科的・関連的な指導の一層の充実を図る。」(同)

「幼児教育との接続の観点から（中略）特に、学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善すること」（第1章 3生活科改訂の要点）と示されている。

ここでの「スタートカリキュラム」は幼児教育との接続のためであるとともに、「小1プロブレムなど、学校生活への適応を図ることが難しい児童の実態」への対応策であったことがわかる。つまり、

- ・落ち着いて座っている
- ・静かに話を聞く
- ・集団行動ができる

などの行動が一定時間できるようにということが背景にあるといえよう。具体的には

- 教科を横断する大単元から各教科へ分化していく教育課程の編成



○合科的な学習の重視

など、現在と変わらぬ方向が示されているものの最初に示したように「子どもが落ち着いているから」「ベテランの先生で生活指導が上手だから」といった学校状況にあり、「小1プロブレム」の困難を抱えていない場合は、これまでと同じ「適応指導」の仕方で入学してきた児童を迎えていた学校も少なくなかったと推測できる。

## (2) スタートカリキュラムの「イメージ」(H27)

平成27年2月に配布された「スタートカリキュラム スタートブック」(国立教育政策研究所)では、「スタートカリキュラムとは、小学校へ入学した子どもが、幼稚園・保育所・認定子ども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラム」と示されている。

○「ゼロからのスタートじゃない！」

○子どもの「安心」「成長」「自立」という思いにこたえる

○学びの芽生えと自覚的な学びをつなぐなどの理念が示されており、

○生活科を中心とした、合科的・関連的な指導

○教科による時間割でなく、3類型による学習など、理念を踏まえ、各校で実施する際の編成の手順や計画についての解説も示された。

一方、「安心は、小学校での生活の支えとなり、いわゆる『小1プロブレム』などの予防や解決につながります。」(国立教育政策研究所報道発表 平成27年1月30日)とされているように、「小1プロブレム」への対応としての側面も期待されている。

理念が明確になり、「やった方がよいのかな」と思ったとしても、「まあ、『小1プロブレム』の状況にはないから」と、それまでとあまり変えずに、児

童を迎えることも多かったのではないだろうか。

## (3) スタートカリキュラムは「必須」(H30)

今回の改訂においては、幼児期から高等学校までの子どもの資質や能力を育成する観点からも「学びの連続性」が繰り返し言われている。小学校入学の際の子どもは、「小学校に入ったばかりの何も知らない1年生」ではなく、「幼稚園や保育所等で年長さんとして活躍し経験を積んできた1年生」として、その「学び」を、リセットすることなく、「主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにする」(小学校学習指導要領第1章総則第2の4学校段階間の接続)そのために「小学校の入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを(中略)編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められる。」(小学校学習指導要領解説総則編 第3章第2節学校段階間の接続)と示された。つまり、新指導要領の本格実施に伴い、全ての学校で、「スタートカリキュラム」を「幼児期の終わりまでの育ってほしい姿」を踏まえ作成し、実施することが「必須」となる。

## 2 スタートカリキュラム、はじめの一步!

### (1) スタートカリキュラムをデザインする。

スタートカリキュラムは「カリキュラム」である。

今回の改訂では、各学校が自分の学校で育てたい子どもの姿を明確にし、教育内容の組織的な関連を図りデザインし、改善していくことが求められている。

小学校の入り口に当たる約1か月を、スタートカリキュラムとして計画し、校内全体で共有することで、「学校カリキュラム」作りへの弾みにもなる。

スタートカリキュラムをデザインする手順は、

- ①幼児期の発達や学びを理解する
  - ②期待する児童の姿を共有する
  - ③各学校のスタートカリキュラムをデザインする
    - ・単元の構成と配列
    - ・週の計画と時間配分
- ※「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」  
平成30年4月 文部科学省 学而出版

と示された。ここでは、練馬区立光和小学校で行った取り組みを紹介し、共に考えたい。

## (2) スタートカリキュラムの実際

### ①幼児期の発達や学びを理解する

光和小学校は、駅の近くにあり、児童数も800名近い大規模校である。1年生も例年140名近く、多い時には30園近くから入学してくる。入学前の一人一人の姿や活躍の様子を十分知ることは難しい。

そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を、入学後の子どもの姿に重ね、どのようなことが得意で、どのようなことが好きなのかをみとめるための一つの指標にしようと、学年で話し合った。

### ②期待する児童の姿を共有する

「毎日楽しく過ごしてほしい。」

「友達と仲よくし、学校大好きな子に育ってほしい。」  
「何でも挑戦し、できることに自信をもってほしい。」  
新しく1年生を迎えるに当たり、1年担任はこのような願いをもった。そこで、学校教育目標とも考えあわせ、以下のような子どもの姿を考えた。

### ◎光和スタートカリキュラムで育てたい子ども

- ・安心して学校生活を送ることができ、明日の登校を楽しみにする子
- ・学校生活における「ひと・もの・こと」と主体的にかかわろうとする子
- ・生活や学習上必要な習慣や技能を身に付け、それらを進んで使おうとする子



### ◎学校の教育目標（光和の子）

- 心身ともに健康で人間性豊かな児童を育てる
- ・考え、表現する子
  - ・思いやりのある子
  - ・たくましい子

### ③各学校のスタートカリキュラムをデザインする

#### ■単元の構成と配列

生活科の「わくわくどきどきしょうがっこう」

では最初に友達を知ったり仲よく遊んだりする活動を行う。そこで、図工の「すきなもののいっぱい」で描いた絵を使って、自分の描いたものを紹介したり、同じものを見つけて喜んだりできるだろうと考えた。また、学校探検では、出会った人に挨拶をしたり、尋ねたりする活動を行う。そこで、国語の「どうぞよろしく」という挨拶や自己紹介の学習を関連をさせよう、と考

## 1年4月 生活科(わくわくタイム)を中心とした各教科等の関連

	4月1・2週(4/6-4/13)	4月3週(4/16-4/20)	4月4週(4/23-4/27)	5月1週・2週(5/1-5/7)
国語	あさ どうぞよろしく 自己紹介	こえのおおきさどうするの なんていおうかな 学校探検の時の挨拶や質問など	うたにあわせてあいうえお どんなおはなしか 図書室探検	ことばをつくらう えをみてはなそう 見たものを人に伝える伝え方
算数	なかまづくりとかず			なんぼんめ
生活科	わくわくどきどき しょうがっこう! はるをみつけよう!		きれいにさいてね	
音楽	みんなであう 自己紹介	おんがくにあわせて		
図工	すきなもののいっぱい	わらべ歌	げんきにおよげこのほり	みてみていっぱいつくったよ
体育	ならびっこ・からだづくりのうんどう こていゆうくをつかって		おにあそび	

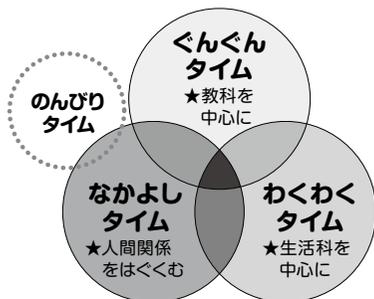
# 見えてきた!「スタートカリキュラム」のカタチ

えた。こうして、できるところから考え、連休前までの4週間の単元配列を作成した。

## ■週の計画と時間配分

おおむねの見通しが立ったところで、「一日の過ごし方」=時間配分を考えた。

### スタートカリキュラムの学習の3類型+α



- ・なかよしタイム⇒教科のねらいはなし。一人一人が安心感をもち新しい人間関係を気付いていくことをねらいとした学習
- ・わくわくタイム⇒合科的・関連的な指導による生活科を中心とした学習
- ・ぐんぐんタイム⇒教科等を中心とした学習
- ・のんびりタイム⇒始業前の支度が終わった後、思い思いに過ごす朝の時間

本校では、3類型+のんびりタイムに学習を分類し、1週目はなかよしタイムを多くし、次第にぐんぐんタイムに移行するように計画した。また、

- ・15分～20分(1/2時間)を1単位とする。
- ・入学前の経験や「学び」を引き出すようにするとともに、児童の実態をよく見て弾力的に変更する。などを方針とし、1週間の計画を立てた。

## ■入学後4日目のなかよしタイムの様子

入学式から四日。朝が対面式であった。上級生に迎えられ、校歌を歌ってもらい、教室に戻った。行事のため、本日は朝ののんびりタイムはなし。でも、支度は対面式の後に、丁寧に行った。支度を終えた子どもたちに、「今朝は何が楽しかったかな、びっくりしたかな」と尋ねると、「学校にもお歌があるけど、幼稚園にもあったよ。」と、キラキラした目で話す。「へえ、歌えるのかな。」と言うと、「歌いたい!」と同じ園出身の友達を誘って大きな声で歌ってくれた。即座に「今日のなかよしタイムはこれにしよう!」と決め、「歌いたい人は歌ってね。どうやって聞くの?」と尋ねると、「静かに聞く」「しっかり聞く」など、聞くことも楽しみにしている様子が見られた。このなかよしタイムの「園歌大会」は歌いたい子どもが次々と続き、2日間を楽しく過ごした。

この時の様子から、自分の育った園をどの子も大事に思っていること、卒園し1年生になったことを誇りに思っていることが、ひしひしと伝わってきた。

簡単ではない。でも、スタートカリキュラムで「学びのつながり」を担保し、「誇り高き年長さん」を、生き生きと学校生活を楽しむ1年生に育みたい。

## 第2週 4月9日(月)第2日目～13日(金)6日目

【ねらい】学校や学校生活への安心感をもち、先生や友達と仲良く関われるようにする

- ・学校の施設の様子や生活のリズムを知り、安心して遊びや生活ができる。
- ・新しい友達の顔や名前を覚え、楽しくかわかることができる。
- ・支度の仕方、机やロッカーの使い方などを知り、行うことができる。

		1年生にかかわる予定	朝	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目
4月9日(月)	2日目	定期健診始	仕方の支度を知る	なかよしタイム【表現】 ※手遊び歌・歌のリクエスト 名前と幼稚園・保育園を紹介する	これからの学校生活の中で、やりたいことやできるよになりたいことを発表する。	皆で使う場所(水飲み場・トイレ・靴箱など)の使い方も確かめながら校舎内を散歩する	帰りの支度 下校の仕方
				余剰カウント	生活:わくわくどきどき	しょうがつこう	学級活動(2)
4月10日(火)	3日目	発育測定	のんびりタイム	なかよしタイム【言語】【人間関係】 ※おはようリレー ※リズムで名前よび。 同じ誕生日・同じ園などで仲間づくりゲーム ※着替えの仕方を確かめながら着替える	ならびっこ 楽しく遊具で遊ぶ	発育測定	初めでの給食【川畑さんのお話】
				余剰カウント	体育:固定遊具を使って	行事	国語:どうぞよろしく
4月11日(水)	4日目	給食準備	なかよしタイム【言語】【人間関係】	安全な学校生活 避難訓練の仕方	避難訓練	やってみよう学習につ	楽しみだね、給食・給食の

# 「十市っ子弁当」で地域の方を笑顔に！ ～「どうせできん」から「一生に一度だけのすばらしい体験」に～

高知県南国市立十市小学校 教諭

増井 貴久

## 1 児童の実態と単元構想

本校は平成27・28年度に、文部科学省指定のスーパー食育スクールとして、食育の実践を行ってきた。29年度からも、地域の方とのつながりを大切にしながら総合的な学習の時間や生活科を中心に食育に取り組んでいる。

私の担任した6年生は、指示された単純な作業はできるが、面倒くさいことは他人任せになりがちで自主性に欠けていた。また、自信がなく、学習意欲の乏しい児童が多くいることが日々の生活の様子や意識調査の結果から見取れた。そのため学校生活のいろいろな場面で「やっても（言っても）無駄やし」「どうせできん」という発言があったり、そういった雰囲気になったりすることがよくあった。

そこで、児童が本気になって活動し、課題を解決していくことを通して、児童の自信へとつなげていきたいと考え、2・3学期の55時間分の単元を構想していった（1学期の総合は平和をテーマに15時間実施）。

前年度までの6年生は、家族へお弁当のプレゼントをしていた。家族の年齢や食べ物の好み等を考慮し、栄養バランスのとれた弁当が作れることを本校食育の仕上げと位置付けていた。

「弁当作り」を継承しつつ、児童に「弁当作りで先輩たちよりも、もっと大きなことに挑戦しよう」と投げかけることで単元のスタートとした。

## 2 「十市っ子弁当」を販売しよう！

### (1) 単元の立ち上げから課題の設定

学習への自信がない児童が多くいることから、ま

ずは取組へのイメージを持ったり活動への意欲を膨らませたりする必要があった。

そこで、特産品を使ったご当地メニューを開発した他校の取組を紹介した。児童は、同じ年齢の子どもたちが、地域を盛り上げる取組をしていることを目の当たりにして驚きを隠せない様子であった。

しかし、その目には驚きや憧れだけではなく、自分たちもやってみたいという期待も見られた。本校の先輩と他校のご当地メニュー開発に負けない自分たちの「弁当作り」への思いが芽生え膨らんだ。そして「自分たちの考えた『十市っ子弁当』を地域のたくさんの人に食べてもらって笑顔になってほしい」という取組のゴールが設定された。



店長さんにプレゼンしている様子

自分たちだけでは大量の弁当を作ることができないことから、校区の量販店（スーパーマーケット）に自分たちが考案したお弁当の調理と販売をしてもらうことを依頼することになった。量販店の店長さんからは、「子どもたちが頑張るなら、協力しましょう」との返事をいただき、お弁当の考案が始まった。



### 「がっつりヘルシー弁当」

ターゲット：若い働き盛りの男性  
コンセプト：ボリュームと健康の両立  
オリジナリティ：中央のご飯をいっとりどりのおかずが囲む

評やった」といった声が聞こえるようになり、意欲的で主体的な言動が増えてきた。校内での中間プレゼンを経て修正を行い、ターゲットやコンセプトを明確にした個性豊かな13種類のお弁当案ができた。そして、お弁当案を量販店の店長さんをはじめとするスタッフの皆さんに対してプレゼンし(国語科「話す・聞く」単元との教科横断的な学習を行った)、アピールした。

## (2) お弁当アンケート実施と

### 整理・分析からお弁当の考案

まず、どのようなお弁当が好まれているのかアンケート調査を行った。ニーズにあったお弁当を作るためアンケートの中身を話し合い、「性別」「年齢」「職業」「お弁当に入れてほしいおかず」「お弁当に出せる金額」をたずねるアンケートを作った。児童の家族や親戚・知り合い・保護者の職場の方などの協力を仰ぎ、429名のアンケートを集めることができた。アンケート結果から、児童は「性別や年齢によって、食べたいおかずも量も違う」「ターゲットを絞ったお弁当にしないといけない」「人気のおかずばかり入れると栄養のバランスがとれない」といった分析をしたり、「せっかくだから、南国市や十市の野菜を入れたい」「自分たちのオリジナルのお弁当にしたい」といった思いが出てきたりした。アンケートの整理・分析から「ターゲットを絞った弁当にする」「自分たちのオリジナル弁当を作る」という具体のテーマが固まった。

低学年から野菜を育て、調理をしてきた本校の児童ではあるが経験・知識ともに十分ではなく、図書館資料やパンフレット・インターネット等を活用したり、栄養教諭にインタビューに行ったりするなどしながらお弁当を考案していった。この頃から「なんだか総合がおもしろい」「次の総合はいつやるの?」「家でおかずを作って妹に食べさせたら大好

## (3) 量販店と粘り強く交渉

量販店からは「13のうちから3つのお弁当案を採用し、10個ずつ30個の販売をする」との返事をいただいた。このことを児童に告げると、児童はそれまでの取組に強い思い入れを持っており、「もう一度交渉したい」と言い出した。

そこで、量販店のスタッフの方と児童が話し合い、交渉する場を設定した。お弁当案が採用されなかった児童からは「僕たちのお弁当が採用されなかった理由をお聞かせいただけますか」「問題を解決できるように考え直したらお弁当の種類を増やしていただけますか」と普段の生活の中では見られない丁寧で真剣な言葉が発せられ、本気の思いが伝わってきた。

量販店からは、不採用になった複数のお弁当案のおかずを組み合わせるという新たな案が提示された。どのお弁当案からも最低一つのおかずは採用するという有難い配慮であった。しかし児童からは「それでは(コンセプトが)ブレブレになるから困る」との発言があり、ここでも児童の強いこだわりや思い入れが感じられた。

この量販店では一日に30食分のお弁当の調理と販売をしており、その実情からは13種類のお弁当

の販売は不可能で、児童は交渉を繰り返しながら現実との折り合いをつけていかなければならないことを学んでいった。

量販店が最大限の努力をしてくださり、最終的に7種類のお弁当を15個ずつ計105個販売することとなった。

販売するお弁当が決まり、地域の方においしいお弁当を届けるために児童と量販店双方が試作品を作って、お互いに試食することにした。この「試食対決」からも児童のこだわりが垣間見え、大人を相手に堂々と主張する頼もしい姿があった。「この弁当は野菜がメインで、十市のナスの食感を楽しんでもらいたいから、もっと野菜を大きくカットしてほしい」「私たちの弁当は子どもから大人までをターゲットにしているので、味付けが辛すぎる。少し甘めにしてほしい」「デザートはみかんではなく、文旦にしてほしい」「高知県の果物を堪能してもらいたい」など児童の熱い思いに、量販店側も可能な限り応えてくださった。

#### (4) お弁当販売を盛り上げるために

お弁当がある程度形になり、販売日が決定したことで、宣伝活動にも力が入っていった。児童からは、チラシ（お店においてもらう用・ビラ配り用）、ポスター、ポップ、看板、のぼり旗、オリジナルキャラクター、学校から各家庭に配るお手紙、学校のホームページへの掲載、店内で流れる館内放送の録音、CM動画撮影、CMソングの作詞作曲などがアイデアとして出され、児童それぞれの得意分野に分かれて準備した。音楽専科の教員や担任のアドバイスを受けながら、パソコンやタブレット、端末を使用したり、音楽の



お弁当キャラクター

授業で学んだ「音楽づくり」の知識・技能を活用したりすることで、納得のいく自信作が次々に生まれていった。

完成したCM動画やアナウンスは販売の2週間程前から店内で流していただいた。

販売日当日には、最後のPRをするために「十市っ子お弁当祭」と銘打った販売記念セレモニーを量販店の駐車場を借りて行った。児童代表の一日店長が中心になって、販売までの取組や思いを寸劇も交えながら発表した。

宣伝の効果もあり販売開始時刻が近づくと、保護者や地域の方が多数つめかけてくれた。そして105個あったお弁当はわずか数十秒で完売となった。

#### (5) お弁当の再販売から継続販売へ

振り返りでは、お弁当が完売したという事実から、児童の中には大きな達成感があった。

しかし、一人の保護者からの手紙を紹介したことで、雰囲気が一変した。そこには、高齢の方が「小学生が作ったお弁当なら」と杖をついて買いに来てくださったのに、たくさんのお客で売り場が騒然としていたために、購入をあきらめて帰って行ってしまったという事実と、安全面への配慮が欠けていたのではないかという厳しい意見が綴られていた。

児童は、「十市っ子お弁当祭は半分成功で半分失敗」という総括をし、量販店にお弁当の再販売を願い出た。高齢の方が安全に購入できるように、販売時のお客の列の並び方や事前予約制を考案した。そして新たなポスターやチラシ・事前の予約券・一目で予約状況がわかる販売ボード等を作成した。予約制によって、仕事の都合で販売時刻に来店することができない方や、高齢の方にもお弁当を買っていただくことができた。想像以上に反響が大きく、追加販売は5回も行うこととなった。

再度の振り返りでは、児童全員で目標達成を喜び合った。また、「お世話にな

## 「十市っ子弁当」で地域の方を笑顔に!

った皆さんにお礼がしたい」との思いから、量販店のトイレ掃除を行うことで、このプロジェクトは終わりを迎えた。

お弁当は、校区にある店舗での限定販売だったが、評判がよく、児童卒業後には県下の9店舗に拡大しての定期的な継続販売となっている。



テレビのインタビューに答える児童

### 3 児童の成長

この取組を通して児童にはたくさんの成長があった。恥ずかしくて、たったの一枚もビラを配ること

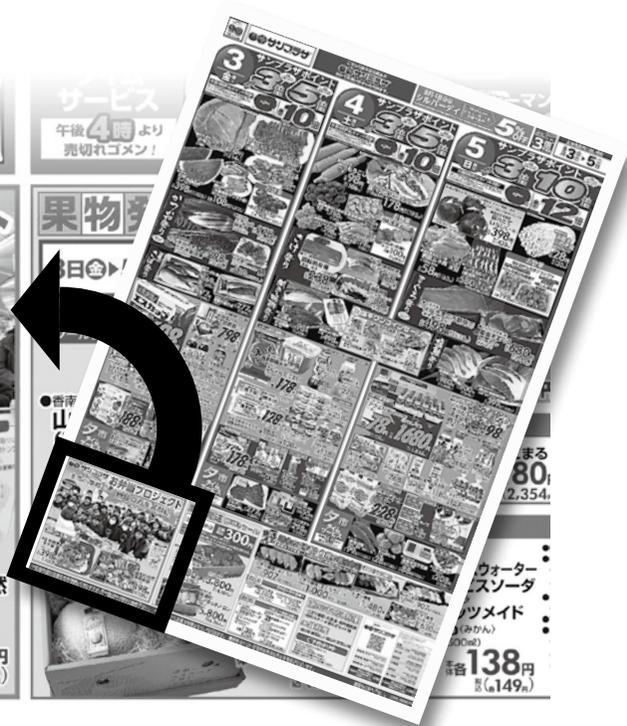
ができなかった子は、お弁当販売日にはたくさんのお客を前にマイクパフォーマンスを見せてくれた。インフルエンザに罹ってしまった子は、どうしても家で休んでいることができず、みんなから離れたところで友だちの活躍やお弁当の売れ行きを見守っていた。テレビ番組のインタビュー取材に臆することなく笑顔で対応していた子やモノクロ印刷のチラシ一枚一枚に心を込めて色塗りをしていた子など、エピソードを挙げていけばきりが無い。

「やっても無駄やし」「どうせできん」が口癖であったのが嘘のようなものである。うまくいかないことがあっても、考え直し、簡単にはあきらめなくなった。他人任せで自主性に欠けていた児童が自分の得意分野を活かし活動することで自分の必要性を見出し、他者から認められる気持ち良さを知った。素直に他者の頑張りを認めることもできるようになった。

「一生に一度だけのすばらしい体験になりました」という児童の一言に心の成長と充実感が凝縮されている。



児童卒業後も継続販売をしている (新聞折込広告)



# 「わくわく楽しく生活科をしたくなる」教科書

学ぶ子どもも先生も

## 1. 「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができる

### ① 学習内容や流れがつかめます

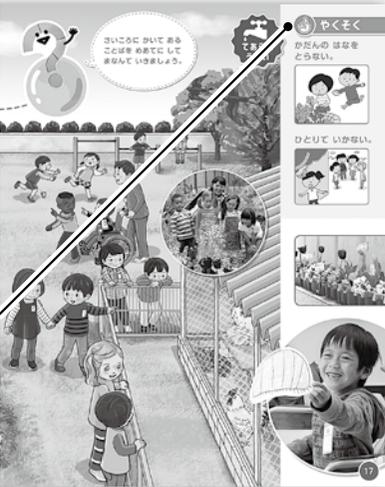


# 「ようになるか」がわかる!

## 「学びのポケット」活用例



(上 p.14~15)



(上 p.16~17)



(上 p.22~23)

## 学習へぐんぐんひきこむ魅力的なキャラクターたち

ひろくて  
どきどきするよ。

ひとか  
たくさんいるよ。



### 「花ちゃん」「大地くん」

上下巻の2年間を通して、二人と一緒に学習をします。時には失敗や試行錯誤をするリアルな子ども像です。

がっこうのことが  
わかるほうほうは  
あるかしら。



### 活動を意味づけ、 価値づける、先生

「どうしてでしょうね。」「次は、どうしたいですか。」「教えてくれてありがとう。」など、子どもたちの活動を深め、高めています。

### 子どもたちと同じ目線で、 一緒に学習する「いぐら」

「なんだ?! この生きものは?!」思わず聞きたくなる不思議なキャラクター。さて、子どもの反応はどうでしょう。きっと、こう言います「あ! 「いぐら」だ!」 「いぐら」は、驚き、喜び、困惑を、子どもたちの代表で「つぶやき」ます。

#### 「いぐら」について

絵本「コンガラガッチ どっちにすむ? の本」シリーズや4コマ漫画「あたまがコンガラガッチ劇場」などで子どもたちに大人気のキャラクター。作者はNHK Eテレ「ピタゴラスイッチ」や「0655・2355」を企画制作する「ユーフラテス」。

がっこうの  
なかを  
たんけんだ!



### 「はてな」キャラクター

具体的な投げかけで、気付きの質を高めます。

# 1. 「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」が

## ②学習の「めあて」がつかめます

### 生活科で育む資質・能力を、「サイコロ」で表現

生活科の教科目標から、育む「力」を六つ抽出し、学習の「めあて」がわかる工夫をしました。  
 子どもたちにとっては“やらされている体験活動”にさようなら、  
 先生にとっては、「この活動のねらいがわからない…」を解消します。

各ページにつけています

## しごとにチャレンジしよう

やってみたいな。できるかな。



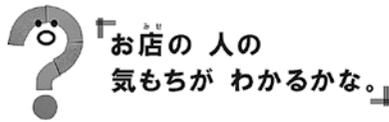
わがしや



おもちゃや



パンや



くつや



やくそく

むりかなと思ったら やらない。



わからないことは大人に聞く。



あれ??



### 保護者のみなさまへ

生活科は、体験を通して、自分自身、身近な人々、社会、自然について、一体的に学ぶ教科です。特に、この教科書では、本来、子どもたちにそなわっている

### 6の力<sup>☆</sup>を

ひき出すことを大切にしています。



きづく

生活科の教科目標

①きづく

②じぶんでできる

③かंगाえる

④つたえる

⑤ちょうせんする

⑥じしんをもつ

何を学ぶか  
(知識・技能の基礎)

どのように学ぶか  
(思考力・判断力・表現力等の基礎)

何ができるようになるか  
(学びに向かう力・人間性等)



しょうぼうしよ



67

(下 p.66~67)

◀保護者にも説明しています(上・下巻 目次)

### ③ 確かな学びを育み、意欲を高めます

## 各単元に「なにをかんじたかな」ページを新設

各単元に、振り返りページを設けました。

「感じる」は、諸感覚を通して全身で受けとめている「考える」の第一歩。

子どもたちにとっては、学習への意欲や自信を育み、先生にとっては、振り返りポイントがキャッチできます。

左ページは、カード例、言語活動、身体表現、新聞、作文など、学習内容に最も適した表現活動を例示しています。

自信や意欲が表れた子どもたちの姿

自己評価のバロメーター

**まんぞくハシゴ**

## なにをかんじたかな



♪ やって見たからわかったよ。♪

まんぞくハシゴ  
えがおのひみつが  
わかったかな

たんけんカード 10月23日 晴れ

わがひやさんのじごとをしたよ

2・1組 青木大地

ラップにぐるんだわがひやをひろくろにつめる  
じごとをしました。わがひやのわがひやの形が  
くずれたよ。おもしろいよ。あきくんが  
来た時は、大きな声で「いらっしゃいませ」と  
言いました。大地くんが「おはようございます」と  
言、てもら。うれしいかなです。

たんけんカード 10月23日 晴れ

図書がんのじごとをしましたよ

2・1組 山口花

本の出し出しのじごとをしました。パソコンで  
読みとって、かえすのがわがひやのじごとです。  
おもしろいよ。あきくんが来た時は、大きな声で  
「いらっしゃいませ」と言いました。大地くんが「おは  
ようございます」と言、てもら。うれしいかなです。  
いつもえがおなのですごいと思いました。



一生けんめい  
はたらくすがたが  
かっこよかったよ。



えがおのひみつが  
かくれているよ。



わたしがインタビューした人

まだまだ。

100

50

69

学びの軌跡を残す

**書き込み欄**

学習を意味づけ、価値づける  
先生の支援や指導

(下 p.68~69)

## 2. 学びのバトンをつなぎます

### ① 幼児期からの学びのバトン

## 新しい「スタートカリキュラム」の提案

「スタートカリキュラム」とは、幼児期における遊びを通じた総合的な学びを、各教科へとスムーズに移行する、入学したばかりの児童に合ったカリキュラムです。子どもたちにとっても、先生にとっても、ゆっくり安心して確実に、学習を進めることができます。

### 絵本「なかよしのき」

幼児期に親しんだ絵から生活科の学習がスタート。「木」は、「気付き」の象徴です。気付きを言葉にすることで、国語の学習にもつながります。

この教材は、弊社「小学国語」1上の第一教材と同じです。国語と関連させる場合の授業展開例は教師用指導書に記します。

第3場面には、振り返りのバロメーター「ハシゴ」が登場



### 「スタートカリキュラム」のデザイン

#### ～ゼロからのスタートではありません～

子どもたちの頭の中は、まだ「国語」「算数」「生活」と、教科で別れていません。幼児期に培った学びの芽を生かして、各教科につなぎます。

▼上 p.8～9



社会生活との関わり

自立心

健康な心と体

道徳性・規範意識の芽生え

▼上 p.10～11



思考力の芽生え

豊かな感性と表現

数量・図形、文字等への関心・感覚

協同性

▼上 p.12～13



言葉による伝え合い

自然との関わり・生命尊重

## ②他教科との学びのバトン

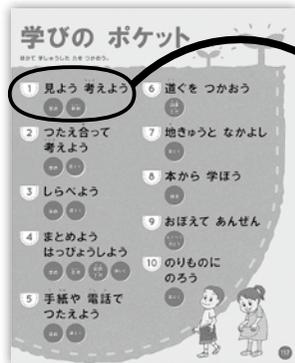
### 「学びのポケット」に各教科の知識や技能を整理

学びをつなげて相互に発揮することで、確かな学びを培います。

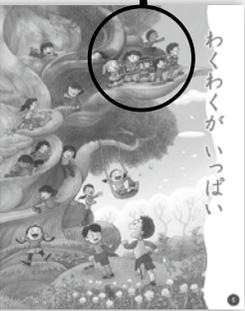
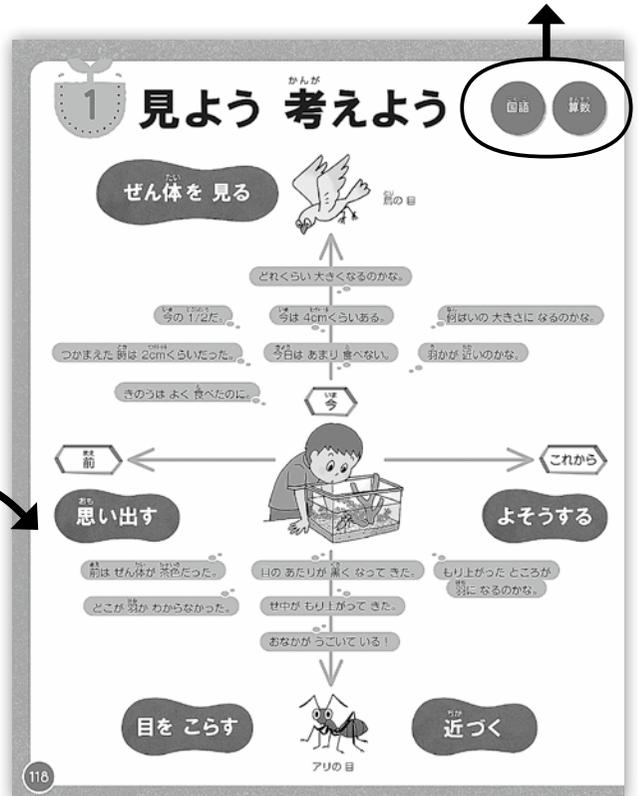
合科的・関連的な指導ができる教科を明示



(上 p.127~136)



(下 p.117~136)



幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 (幼稚園教育要領)

10の姿

## ③ 中学年以降への学びのバトン

見通しをもって進級することができます。

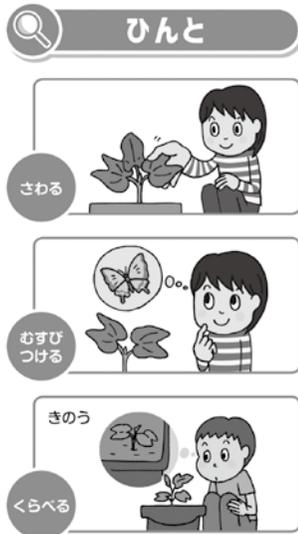


### 3. 思考力を培う「しかけ」がいっぱいです

## ① 追究の鬼を育てる“思考スイッチ”をつくる

思考力を磨く学習活動を豊富に設定しています。

「見つける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫する」などを繰り返し提示



(上 p.82~83)



(下 p.92~93)

## ②アタマの中を「見える化」

論理的な思考を行う学習活動や、思考ツールを取り入れた板書を例示しています。プログラミング的思考を育成します。

もっと知りたいことをせいりしよう

心にのこっているのはどんなことかな。

わがしやさんがここに手をふって来ていました。

わがしやさんの えがいの ひみつを しらべかた

よそうは 当たるかな。

62

63

(下 p.62~63)

## ③「想像」と「創造」をたくましくする「もしも」

知識や経験を総動員させて、子どもならではの豊かな発想を引き出します。予測困難な社会の変化に主体的にかかわる力を引き出し、よりよく豊かに生きようとする資質・能力を引き出します。

もしも

生きもののことがわかるマイクがあったら。

71

(上 p.71)

もしも

かこやみらいを見ることが出来るモニターがあったら。

72

(下 p.45)

## ④新しい学び方の提案「まなびリンク」

学習に役立つ情報を見ることができるQRコードをつけました。

(上 p.34)

まいにちみよう

どんなふうにおおきくなるのかな。

お試し頂けます!

上巻

下巻



第17回

# 地球となかよし メッセージ 作品募集 (2019年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、  
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に  
参加賞が  
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2019年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品 テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと



前回  
入選作品

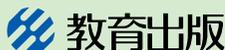
## 四季のある日本

私たちが住んでいる地球。その中でも、私が住んでいる日本には、春夏秋冬という四季があります。その事により、旬の食べ物や、その時期にしか見られない動物や植物がたくさんあります。そして、夏は暑く、冬は寒いといった特徴もあります。

しかし最近では、地球温暖化により、少しずつ季節がくるっているように感じます。

これから先も、地球に住みつづける私たちが、四季を感じながら生きていくには、地球をよごさず、動物や植物を大切にしていける必要があると、ポスターをかいたことにより、あらためて気づくことができました。(小学4年)

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね  
<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>



「地球となかよし」事務局 TEL. 03-3238-6862 FAX. 03-3238-6887  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

生活科・総合通信 そよかぜ通信 【2019年 春号】2019年3月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集局

印刷：大日本印刷株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10  
URL <https://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

発行：教育出版株式会社 代表者：伊東千尋

発行所：教育出版株式会社

電話 03-3238-6864 (内容について)  
03-3238-6901 (配送について)



## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のがびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003	札幌市中央区北三條西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011	函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014	仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011	名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056	大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051	広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004	松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒812-0007	福岡市博多区東恵比寿2-11-30 クレセント東福岡 E室 TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
沖縄営業所	〒901-0155	那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411

本資料は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」ののっとり、配付を許可されているものです。